

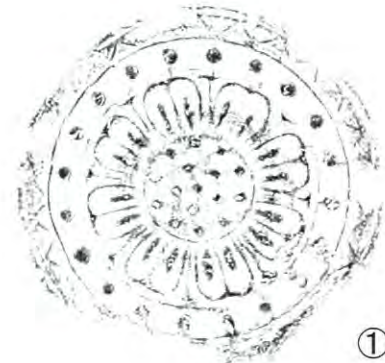
ひがしゆげいせき ゆげでらあと
東弓削遺跡・弓削寺跡

-現地説明会資料-

公益財団法人 八尾市文化財調査研究会
 平成28(2016)年9月18日(日)



興福寺式軒丸瓦(6301A型式)



①



興福寺式軒平瓦(6671A型式)



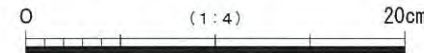
②



東大寺式軒平瓦(6732R型式)



③



平城京出土軒瓦(左)と東弓削遺跡・弓削寺跡出土軒瓦(右)

2・古代瓦について

今回の調査では、奈良時代後半(8世紀後半)に比定される軒丸瓦や軒平瓦が出土しました。①は瓦当面に傷が存在することから、奈良市興福寺出土の興福寺式軒丸瓦(6301A型式)と同じ範(木製の型)で作られた軒丸瓦であることが明らかになりました。②も興福寺式軒平瓦(6671A型式)と同じ範からできた軒平瓦ですが、瓦の作り方に違いが認められ、興福寺出土軒平瓦よりも時期的に新しいものであることが分かりました。③は東大寺式軒平瓦に非常によく似た文様の軒平瓦ですが、同じ範から作られたものではありませんでした。しかしながら、平城京内に建立された称徳天皇が発願した西大寺や西隆寺から出土した東大寺式軒平瓦(6732R型式)の文様に類似することが明らかになりました。以上のことから、これらの軒瓦は、平城京内の主要な寺院に使用されていたいわゆる都の瓦であることが判明しました。

3・まとめ

今回出土した多量の瓦は、残存状態が良好であることから、本地付近で使用されていた瓦と考えられ、本地付近に古代寺院が存在したことが確実視されます。出土した瓦の中には、大阪府下では初めてとなる興福寺式軒丸瓦・軒平瓦や東大寺式系軒平瓦など平城京内の主要な寺院に使用された瓦が含まれており、平城京の瓦が本地に持ち込まれていたことが明らかになりました。本地周辺における奈良時代後半の古代寺院といえば、由義寺(弓削寺)が存在したことが『続日本紀』の記載から推測されますが、今回の瓦の出土は、それを可視的に示唆する成果として注目されます。

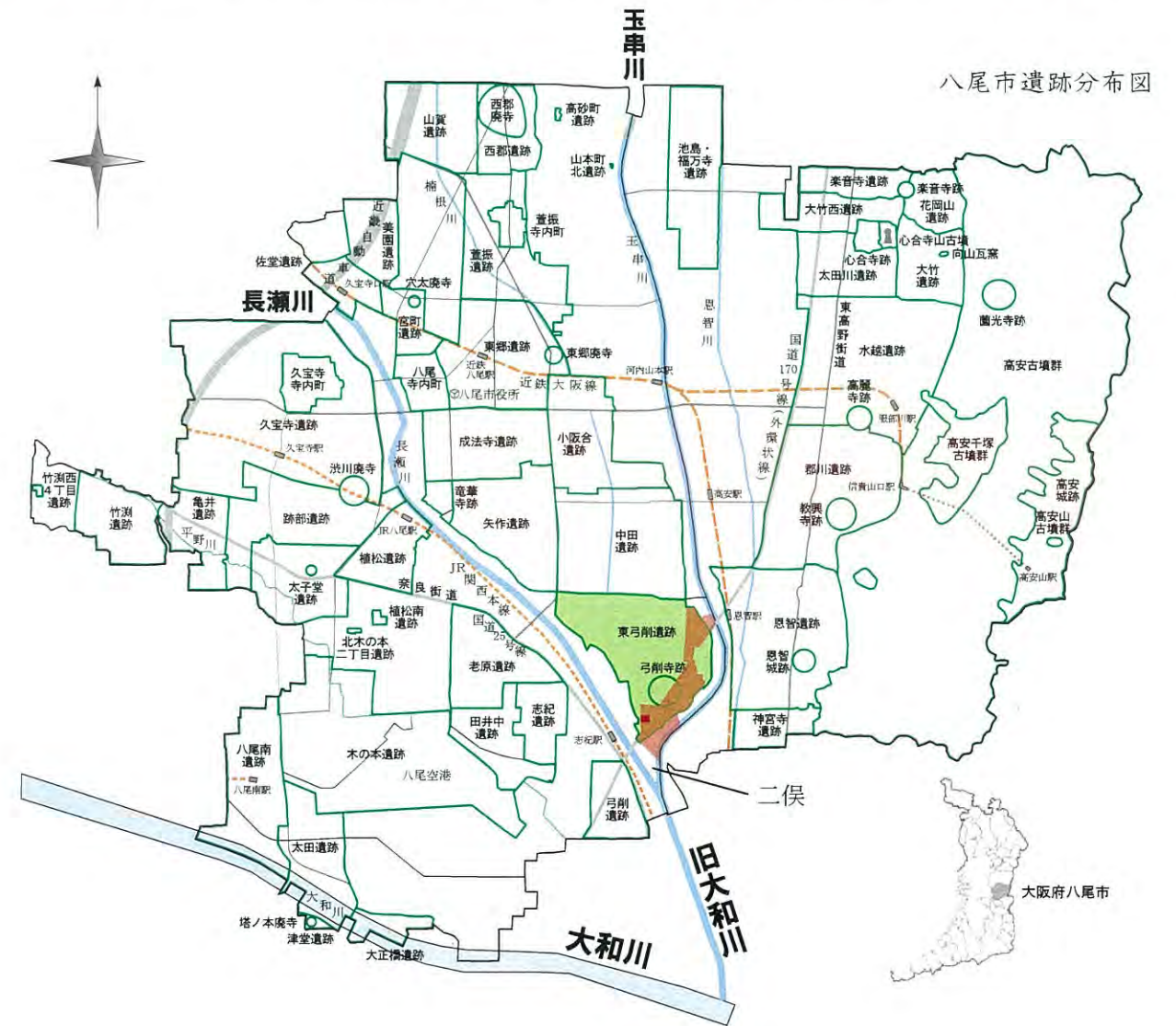
由義寺(弓削寺)は、本地付近が出身地とされる弓削道鏡が造営に深く関与していたことが推測されます。平城京内で使用されていた都の瓦が本地で出土したことは、法王まで登りつめた道鏡の権力の大きさを示すものといえます。由義寺(弓削寺)の発見は、未だ明らかにされていない由義宮(ゆげのみや)、西京(にしのかきょう)の実態を解明する上で貴重な成果といえます。

1・はじめに

東弓削遺跡・弓削寺跡は、大阪府八尾市の南部に位置します。現在の行政区画では、八尾木、東弓削、都塚の東西約1.3m、南北約1.2mが遺跡の範囲と推測されます。地形的には、旧大和川の主流で、本遺跡南部の二股付近で分流する長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に立地する遺跡です。本遺跡は、昭和42(1967)年に行われた国道170号大阪外環状線の工事の際、都塚、東弓削付近で土器や瓦が多量に出土したことにより、遺跡の存在が明らかになりました。これまでに行われた発掘調査では、弥生時代中期(前2世紀頃)~中世(15世紀頃)の遺跡が展開していることが判明しています。

東弓削遺跡・弓削寺跡一帯は、平安時代初頭(8世紀末頃)に編纂の『続日本紀(しよくにほんぎ)』に記された、称徳天皇(しょうとくてんのう)や弓削道鏡(ゆげのどうきょう)にゆかりのある「由義寺(弓削寺)(ゆげでら)」、「由義宮(ゆげのみや)」、「西京(にしのかきょう)」の推定地に位置します。

昨年の12月から実施している発掘調査では、主に弥生時代中期、古墳時代前期(4世紀頃)、古代(8世紀頃)の遺構や遺物が検出されました。特に、多量の古代瓦をはじめ、寺院などの建物に使用されたと考えられる凝灰岩(ぎょうかいがん)製の切石(きりいし)などが出土しており、注目されます。



調査区位置図

興福寺式軒平瓦
(こうふくじしきのきひらがわら)



興福寺式軒丸瓦
(こうふくじしきのきまるがわら)



C 地区
C1地区

東大寺式軒平瓦
(とうだいじしきのきひらがわら)



調査完了
調査中



主な検出遺構



A地区 古墳時代前期の溝
布留式(ふるしき)土器が密集して出土



B地区 奈良時代の蔵骨器(そうこつき)
須恵器短頸壺(たんけいこ)+蓋(ふた)



B地区 奈良時代の井戸
上段は横板組、下段は木櫃(ひつ)



B地区 中世の井戸(凝灰岩を使用)
上段は石組、下段は曲物(まげもの)



C1地区 瓦の出土状況



C1地区 中世の井戸(古代の瓦を使用)